

活き仏

野村胡堂

一

「親分、面白くてたまらないという話を聞かせましょうか」

ガラッ八の八五郎は、膝つ小僧を気にしながら、真四角に坐りました。こんな調子で始めるときは、お小遣こづかいをせびるか、平次の知恵の小出しを引出そうとする下心があるに決っております。

「金儲けの話はいけないが、その外の事なら、大概たいがい我慢をして聴いてやるよ、惚気のろけなんざいちばん宜いね——誰がいったいお前の女房になりたいって言い出したんだ」

銭形平次——江戸開府以来の捕物の名人と言われた銭形平次は、いつもこんな調子でガラッ八の話を受けるのでした。

「そんな気障きざな話じゃありませんよ。ね、親分」

「少し果し眼になりやがったな」

「音羽の女殺しの話は聴いたでしょう」

「聴いたよ。お小夜とか言う、良い年増が殺されたんだってね、——商売人あがりで、殺されても不足のねえほど罪を作っているというじゃないか」

二三日前の話でしょう、平次はもうそれを聴いて居たのです。

「商売人上りには違えねえが、雑司ぞうしガ谷名物やの鉄心道人の弟子で袈裟けさを掛けて歩く凄すしい年増だ。殺されたとたんに紫の雲がおりて来て、通し駕籠で極楽へ行こうという代物しろものだからおどろくでしょう」

「なるほど、話は面白そうだな。もう少し筋を通して見な」

平次もかなり好奇心を動かした様子です。

「鉄心道人のことは、親分も聴いているでしょう」

「大層あらたかな道者だって言うじゃないか。やっぱり法螺の貝を吹いたり、護摩を焚いたりするのかい」

「そんな事はしねえが、説教はする。八宗兼学の大した修業者だが、この世の欲を絶って、小さい庵室に籠り、若い弟子の鉄童といっしょに、朝夕お経ばかり読んでいる」

「で？」

「それで暮しになるから不思議じゃありませんか。ね、親分」

「——」

平次は黙ってその先を促しました。合槌を打つと何処まで脱線するかわかりません。

「尤も信心の衆は、加持祈禱をして貰ったと言っちゃ金を持って行く。が、鉄心道人はどうしても受取らねえ。罰の当たった話で——」

「そう言う手前の方が余っぽど罰当りだ」

「米や味噌や、季節の青物は取るそうだからまず命には別条ない——」

「それから何うした」

八五郎の話のテムポの遅さにじれて、平次はやけに吐月峰を叩きました。

「だから、音羽から雑司ガ谷目白へかけての信心は大変なものですよ。あの辺へ行ってうっかり鉄心道人の悪口でも言おうものなら、請合袋叩きにされる」

「で——」

「お小夜の殺された話は、鉄心道人の事から話さなくちや筋が通りませんよ。何しろ、明日という日は鉄心道人の庵室へ乗り込んで、朝夕の世話をすることになって居た女ですからねエ」

「梵妻だいくになるつもりだったのかい」

「飛んでもない。鉄心道人の教えでは、女犯にょはんは何よりの禁物で、雌猫めすねこも側へは寄せない」

「お小夜は雄猫と間違えられた」

「冗談じゃない、——多勢の弟子の中から選ばれて、道人の側近くつか仕えながら、朝夕教えを聴くことになったんだから大したものでしょう」

「それから」

「明日はいよいよ音羽から雑司ガ谷中の信者総出で、お小夜を庵室に送り込もうという矢先かんじんき、肝腎のお小夜が脇差でなぶり殺しにされたんだから騒ぎでしょう」

「なぶり殺し？」

「十二三カ所も傷があったそうだから、なぶり殺しに違いないじゃありませんか。よほど深い怨みがあったんでしょ」

「急所を知らないんで、無闇やたら矢鱈やたらにきったかも知れないな」

「でも、下手人は武家らしいという話ですぜ」

「武家？」

「お小夜が勤めをしている頃の深間ふかまで、浅川団七郎という弱い敵役見たいな名前の浪人者があつたんですって」

「フム」

「その浪人者が、チヨイチヨイお小夜のところへ来たんだそうで、——米屋の越後屋兼松えちごやが、お小夜の家で三度も逢っていますよ」

「それで」

「お小夜が殺されてから姿を見せないところを見ると、その野郎が一番怪しくなります」

「お小夜は綺麗な女だったのかい」

平次は話題を転じました。

「綺麗というよりは凄い女でしたよ。あつしの逢ったのはもう三年も前だが――」

ガラッ八は話しつづけました。

お小夜は三年前まで三浦屋でお職を張っていたのを、上野の役僧某に請出されて入谷に囲われ、半年経たないうちに飛び出して、根岸の大親分の持物になりましたが、そこも巧みに後足で砂を蹴って、千石取の旗本某の妾になり、三転四転して、有名な立女形中村某の家の押掛女房になったりしていました。

そんな事も、長く続いてせいぜい半年くらい、鮮かに転身して、音羽に世帯を持ったのはこの春あたり。しばらくは、下女一人猫の子一匹の神妙な暮しをつづけて居るうち、何時からともかく鉄心道人のところに通い始め、紅も白粉も洗い落して、半歳余りの精進をつづけた後、鉄心道人にその堅固な信心を見込まれ、薪水の世話をするために、別棟ながら、道人の起居する庵室に入ることになったのです。

「ね、親分。勿体ないじゃありませんか」

八五郎はこう言って、額を叩くのでした。

「勿体ないって奴があるかい」

「とにかく、三浦屋のお職まで張った女が、袈裟を掛けて数珠を爪繰りながら歩くんだから、象の上に乗つけると、そのまま普賢

菩薩だ」

「宜い加減にしないかよ、馬鹿馬鹿しい」

「色白で愛嬌があつて、こう下つ脹れで眼の切れが長くて、唇が真つ紅で——好い女でしたよ、親分。その熟れきつた良い年増が、庵室に入つていよいよ尼さんの玉子になろうという前の晩、滅茶滅茶に斬られて死んだんですぜ。こいつは近頃の面白い話じゃありませんか、御用聞冥利、ちよいと覗いて見ませんか、親分」

ガラツ八の八五郎は生得の順風耳を働かせて、江戸中からこんな怪奇なニュースを嗅ぎ出して来ては、親分の平次の出馬をせがむのでした。

二

『玉の輿の呪』(第三巻参照)以来、平次の腕に心から推服している三つ股の源吉は、このお小夜殺しをすつかり持て余してしまつて、五日目には平次のところへ助け舟を求めに来たのでした。

「銭形の親分、俺にはどうも見当が付かねえ。十手捕縄を預つて、そんな事を言っちゃ、お上に対しても済まねえわけだが、縄張りのうちに殺しがあるというのに、五日も経つて下手人の匂いのあるのさえ挙げ兼ねたとあっちゃ、俺の顔が立たねえ。済まねえが知恵をかしてくれないか」

他の御用聞と異つて、銭形平次なら、無暗な功名争いをする筈もなく、三つ股の源吉の顔の潰れないように、一件を始末してくれるだろうと思つたのです。

「宜いとも、俺で役に立つ事なら」



©2017 萩 柚月

銭形平次は何んの蟠りわたかまもなく御輿みこしをあげました。

源吉に案内させて、八五郎と一緒に音羽へ行って見ると、何もかも済んだ後で、銭形平次でも手の付けようはありません。

お小夜の家はもとのままですが、たった一人の下女のお米は調べが済むまで里へ帰すこともならず三毛猫みけねこといっしょに淋しく暮しております。

「お前の家はどこだえ」

「厚木あつきぎ在だよ」

平次の問いに対して、妙に怒っているような調子です。年頃は十八九、番茶なら少し出過ぎたくらいですが、むくつけき様子を見ると、江戸へ来て、まだ三月とは経っていないでしょう。

「あの晩どうしていたんだ」

「風呂へ入って来て、御新造さんへ声を掛けて寝ただ。翌る朝お

隣りの皆次さんに、雨戸が開いているぞと声を掛けられて、びつくりして飛び起きて見ると、御新造さんは殺されて居たでねえか」
むくつけき娘ですが、相模言葉ながら、思いの外達弁にまくし立てます。

「風呂から帰って声を掛けたとき、返事がなかったのか」

「よく眠って居るべえと思っただよ」

「そのとき雨戸は閉って居たのかい」

「私はお勝手から入ったから、御新込さんの雨戸は知らねえよ」

それでは何んにもなりません。

「日常、ここへ出入りするのほどんな人たちだ」

「お隣の皆次さんと——これは紙屋さんだよ。地主の寅吉さんと、

庵室の鉄童さん、それから米屋の兼松旦那、尤も米屋の旦那は滅

多に来ねえだよ」

「それつきりか」

「もう一人、御浪人の浅川団七郎とか言う人がときどき来るが、

おらは後姿しか知らねえだよ」

「よしよし、そんな事でたくさんだろう」

平次はそれ以上を聴こうともしません。

「いちばん繁々通うのは誰だい」

ガラッ八は後ろから口を出しました。

「地主の寅吉とか言う男だ。訊かなくたって解っているよ」

平次は一番先に寅吉を挙げた下女の言葉の調子から、そのくら

いのことは判断している様子です。

「お小夜が殺された晩、誰も来なかったかい」

とガラッ八。

「地主の寅吉旦那が来ただよ、話がこんがらかった様子で、御新造さんと何にか言い合っていたのだが——おらは御新造さんにせき立てられて、表の湯屋へ行つてしまったから、どう納まったか後には知らねえ」

平次はそれを聴くと後ろをふり向きしました。三つ股の源吉はその寅吉を縛らずにいる筈はないと思つたのです。

「寅吉は一応引立てて見たが、どうしても小夜を殺したとは言わねえ、——盗られた物はなし、寅吉より外に、下手人の匂いのするものもないが」

源吉はすっかり投げて居ります。

「浅川団七郎という浪人者は」

「そいつはまるで雲を掴むような話だ。お小夜のところへ来る時は、大抵頭巾を冠ずきんつていたそうだし、お小夜はおくびにも出さなかつたから、何処に住んでいるか、まるつきり見当がつかねえ。越後屋の主人が確かに顔を見たと言っているが、色白で四十前後で、ベツトリと濃い青髯あおひげの跡のある、とだけじゃ——そんな浪人者は江戸に何百人いるか解らない」

三つ股の源吉の言うのは尤もつともでした。

「八、こいつは思つたよりむずかしいぜ。当分神田へ帰らねえことにして、音羽へ泊り込むとしようか」

銭形平次がそんな事を言うのですから、よくよくの難事件と見込んだのでしよう。

下女のお米を責めたところで、大した証拠も上らなかつたので、平次はその足を伸して、雑司ガ谷の鬼子母神裏にある鉄心道人の庵室を訪ねました。

多寡が厄病神のような流行物——と鼻であしらって来た平次も、庵室へ行って見て、まるつきり予想と違っているので驚きました。竹の柱に茅の屋根という小唄の文句の通りの見る影もない庵室の奥に、修業者鉄心道人はささやかな仏壇を前にして読経中で、その後ろに居流れた善男善女は、一本気の信心に凝り固まった、朴訥そのものの姿を見るような人達ばかりでした。

鉄心道人は四十前後のまだ壮年の修業者で、細面の眼の大きい、強烈な精神力の持主らしい様子までが、平次に好感を持たせます。

——こ奴はただの山師ではないぞ、——

平次はそんな事を考えながら、開けっ放した庵室の中を見ておりました。が、読経の声凛々と響き渡ると、それに合せて念仏を称える善男善女の声が、一種の情熱的なリズムになって、平次の齋した世俗の『御用』などは通りそうもありません。

平次はそつと裏口の方へ廻りました。

二十歳ばかりの目鼻立の柔和な若い弟子が、腰衣を着けたまま井戸端で水を汲んでいたのです。

「お前さんは鉄童さんと言うんだね」

「ハイ」

折目の正しい返事に、平次も少し面喰いました。

「お小夜が殺された話は知ってるだろうね」

平次の問いの気のきかなさ。

「それはもう、よく存じておりますよ」

鉄童は莞爾にっこりとして手桶をおきました。

「お前さんはどう思いなさる」

「――」

「誰が殺したか、見当ぐらいは付くだろう」

「その見当が付けば――」

鉄童は皮肉な微笑を浮べて、平次の腰のあたりを見るのです。

『還俗げんぞくして御用聞になる』とでも言いたいところだったでしょう。

「お小夜が殺されて喜んでいるものがあるだろう」

平次は我にもあらず愚問ぐもんを連発しました。

「私も喜んでおりますよ」

鉄童の答えの意外さ。

「？」

「あれは法難でございました。――心を入れ換かえたと言っても、

お小夜殿はあの通り美しい。お師匠様のお側には置きたくない方
でしたよ」

「？」

「上野の役僧が一人、お小夜殿のために寺を追われました。入谷

の親分が一人、子分に見放され、千五百石の旗本が潰つぶれ、名題役

者が一人首を縊くりました。――外面如菩薩にょぼさつ、内心如夜叉にょしゃ、――恐ろ

しいことではございましたよ」

鉄童はそう言って、目の前で数珠じゆずを振るのです。

「あの晩、お前さんはどこに居なすった」

平次の問いは唐突で乱暴でした。

「庵寔に居りましたよ、——間違っちゃいけません。私には羅刹らせつ女じよを解脱させる法力はありません」

謎のような言葉を残したまま、鉄童は手桶を提げて庵室へ入って行きました。

もういちど表へ廻ると、信心の男女は大方散って、庵主の鉄心道人が、若い男と何やら事務的なことを打合せております。

「越後屋の兼松だよ」

三またつ股またの源吉はそつと囁やきました。雑司ガ谷から音羽へかけての物持で、手広く米屋をやって居る兼松は、鉄心道人の第一番の大檀那だんなで、庵室を建ててやったのも、諸経費の不足を出してやるのも、みんなこの男の篤志とくしだということです。

「越接屋さん、銭形の親分が、道人に少し訊きたいことがあるそうだよ」

源吉は兼松をさし招いてこやう囁やきました。

「それは困りました」

越後屋兼松は渋い顔をしました。この盲信者に取っては、岡っ引と鉄心道人とは、全く世界の違った人間のように思っている様子です。

「お上の御用を勤める方に不自由をさせてはいけません。私が逢いまししょうよ、越後屋さん」

後ろから静かに声をかけたのは、鉄心道人でした。歳の割には若々しい声で、何んでもないことがひどく人の心持に沁しみ入りま
す。八宗兼学の大智識ちしきというにしては、少し人間味があり過ぎますが、柔かい次低音バリトーンには一方かたでない魅力のあることは事実です。

「お小夜が殺されたことは聴いたでしょうな」

「いかにも聴きましたよ」

平次の突っ込んだ調子を、鉄心道人は柔かに押し包みました。「下手人の心当りはありませんか」

「いや少しも、——気の毒なお小夜殿。なぶり殺しに逢うほどの罪はなかった筈だが——」

鉄心道人は眉を垂れて、何やら暫らくは念じております。

「鉄童さんはその晩、確かに外へ出なかったでしょうな」

「出るわけはありませんよ、庵室はこの通りだった二た間、鉄童が臥返りを打ったのも解ります」

鉄心道人の言葉には何んの疑いを挟みようもありません。平次は自分ながらこの掛け合いの不手際さにじれ込んでおります。

こうなると平次は、丁寧に挨拶をして引揚げる外に術がありません。もういちど井戸端に廻ると、弟子の鉄童は盥の前にキッチンと坐って一生懸命洗濯をしておりました。

「この水は良いだろうな」

「江戸一番の良い水ですよ、この辺は高台だから」

平次の問いに、無造作な調子で鉄童は答えます。

「一杯呑みたいが、柄杓か茶碗を借りたいな」

「ハイ」

鉄童は寺住居の者らしい気軽さで、長刀草履を穿いたままお勝手に戻り、中へ入って茶碗を一つ持って来てくれました。

一と瓶くみ上げて、一杯キューツと呑んだ平次、

「甘露甘露、なるほどこれは良い水だ」

十一月の水の味は格別だったのでしよう、平次は舌を鳴らしてもう一杯傾けます。

「親分、止しましょうよ。そいつは何杯呑んだって酔いはしませんぜ」

ガラッ八はそんな事を言つて眺めているのです。

四

「銭形の親分さん」

目白坂まで来ると、後から追いつかり加減に声をかける者がありません。

「越後屋さんじゃないか」

平次は足を淀ませました。

先刻庵室で挨拶した米屋の兼松が、何にか言いたい事がある様子で後から来たのでした。

「下手人のお見込みが付きましたか、親分さん」

兼松は少し息をきらしております。

二十八九、せいぜい三十くらい、若いにしては分別者らしい男で、浅黒い引緊った顔にも、キリリと結んだ口にも、やり手らしい気魄があります。

「少しも判らない、困ったことに日が経ち過ぎたよ」

妖艶なお小夜も知らず、その殺された後の惨澹たる有様も見なかつた平次は、後から証拠をたぐるじれつたさに閉口している様子です。

「御尤もですが、地主の寅吉さんだけは下手人じゃございませんよ、親分」

「それはどう言うわけだ」

平次はツイ開き直りました。それほど兼松の調手が断乎としていたのです。

「寅吉さんを縛った三つ股の親分さんにはお気の毒ですが――」

兼松の眼は、チラリと源吉を見やりました。この御用聞が以てのほかの機嫌なことは、そのそつぽを向いた頬のあたりの瘰癧けいれんでも判ります。

「御存じかも知れませんが、同じ音羽に住んで、お互に何んとか人に立てられるだけに、私と寅吉さんは仲が悪うございます。それにつけても、寅吉さんが人殺しの罪を被まて、お処刑しおきに上るのを見ちゃいられません」

「？」

兼松の一生懸命さが、妙に平次を引入れました。

「あの晩寅吉さんが、お小夜の家を出て来るのを、仏は確かにこの眼で見届けました。先刻まで近所へ聞えるほど言い争って居たのが、どう仲直りしたのか、鼻唄でも歌い出した様子で、ニヤニヤしながら出て来たくらいですから、人なんか殺したんでない事はよく判ります。それに路地あかりへ射して来る灯でよく見ましたが、寅吉さんは脇差も出刃庖丁てばぼうちようも持ちませんでした。後ろから灯を差出して、寅吉さんの足許を見せてやっていたのは、お小夜だったかも知りません。そのころ下女のお米は風呂へ行っていたそうですから」

「お前さんは何用があつて、そんなところにいたんだ」
平次の問いは峻烈しゅんれつでした。

「私はいろいろ道人様のお世話をしておりますから、明日庵室へ

入るといふお小夜の様子を見に来ましたが、寅吉さんが出て来たのを見ると、出過ぎたことをするんでもないと思つて、そのまま引返しました」

兼松の答えははっきりしております。

「お前さんと寅吉とは余つ程仲が悪かつたんだね」

「へエ、——世間では何んとか申します。行違ひは去年のお祭の揉め事からで——」

兼松と寅吉と仲の悪いのは、同じ音羽の物持で、両雄並び立たぬためだったでしょう。

「お前さんはお小夜をどう思つていたんだ」

「道人様が側近く召されるのを、かれこれ言つては悪いと思つて差控えていましたが、正直のところあまり好きじゃございませんでした」

と兼松。

「寅言は？」

「寅吉さんはお小夜のところへ繁々通つていたようで、これは町内で知らない者はありません。尤もお小夜は何んと言つていたか、そこまでは判りませんが」

「寅吉も庵室へ出入りするのか」

「飛んでもない」

兼松の様子では、寅吉は縁なき衆生のようです。

「外にお小夜を怨んでいる者は？」

「算えきれないほどあります。ことに近頃ちよいちよい姿を見せる浅川団七郎——」

兼松はそう言つて、脅かされたように、ゴクリと固唾を呑みま

した。

「浅川という浪人者は始終ここへ姿を見せるのかな」

「お小夜が殺された晩も、頭中ずきんで顔を隠して、路地の外をうろうろしていた様子でした」

「その浪人者の住居は？」

「そこまでは存じません。ときどき後ろ姿を見て、お小夜に訊いて浅川団七郎という名前を知っただけです。来る日は前以って下女のお米をお使いか、風呂か、遊びに出す様子でした。お小夜は賢い女かしこでしたから、変な浪人者の訪ねて来るのを、誰にも知られなくなかったのでしょう」

越後屋兼松の説明は、此方で望む以上に行届きます。

「お前さんは、浅川とか言う浪人者に逢ったことがあるそうじゃないか」

と平次。

「たった一度ありました。一と月ばかり前、蒸し暑い日で、さすがに頭巾を冠ってはいられなかったのでしょうか。お小夜の家の格子戸の中で、覆面頭巾をヒョイと脱ぬいだのを見てしまったのです」

「人相は？」

「四十前後の良い男でございました。何より色白の顔と、青岱せいたいを塗ったような、両頬の青髯の跡が目立ちました」

「外には誰も浅川団七郎の顔を見た者はないだろうな」

「さア」

「親分、——外にも浅川団七郎の顔を見た者がありますよ」
ガラッ八は横合から口を出しました。

「誰だい」

「そいつは滅多に言われませんよ、半襟一と掛け奢る約束で聞込んだネタで」

「大層奮みゃがったな」

「それ程でもねえが——」

「ハッハッハッ」

平次は何んとはなしに空を仰いで笑いました。初冬の空は申分なく澄みきって、夕陽はもう目白の林に落ちかかっております。

五

寅吉の女房にも逢って見ましたが、これは嫉妬と心配で半病人のようになっていてだけで、何んの役にも立ちません。

最後にもういちどお小夜の家へ平次と八五郎と、三つ股の源吉と、越後屋の兼松と立ち寄りしました。

お米の言葉と、源吉の調べとを併せて、もういちど平次の頭で整理して見ましたが、下手人はお小夜の知己で、木戸を開けて狭い庭から通して貰って、一気にお小夜を殺して帰ったというほかには何んの手掛りもありません。

十二三カ所の傷だったと言いますが、ツイ近所の人も、宵のうちの殺人騒ぎを知らなかったところを見ると、多分最初の一撃で致命的な傷を与え、声を出す力も騒ぐ力もなくなったものでしょう。そう考えるとやはり、下手人は明日の庵室入りをくい止めようとする、必死の怨みか妬みか妬みを持ったものという事になります。

「八、お米を呼んで来てくれ」

「へエ——」

八五郎は隣の部屋で神妙に縫物をしている下女のお米を呼んで来ました。

「俺は半襟一と掛なんてケチな事は言わねえ、帯でもあわせ裕でも買ってやるから、浅川団七郎という浪人者の素姓を知ってるなら話してくれ」

平次はいきなり高飛車に出ました。

「そいつは違やしませんか、親分」

以ての外の顔をしたのは八五郎です。

「黙っている、明日まで引延していて、どんな事になるかも判らない——なア、お米、知ってる事は皆んな申上げた方が宜いよ」

平次は何時ものたしなみに似ず、懐から十手を覗かせたりするのでした。

「何んにも知らねえだよ、御浪人の後ろ姿を二度ばかり見たただよ」

お米は何に脅おびえたか、頑固に頭を振ります。

「お前は何にか知っているに違いない。言わなきゃ縛おびって行くが、どうだ」

「知らねえだよ、おらは、何んにも知らねえだよ」

お米は部屋の隅にピタリと引っ込んで、脅おびえきった猫のような眼を光らせます。その無智な頑固さを見て取ると、力攻めで急に口を開けさせるわけには行かないと見たか、

「八、気の毒だがこれからすぐ三浦屋へ行ってくれ。お小夜が勤めをしている時分の深間を一人残らず手繰たぐり出すんだ。それから下っ引を五六人狩り出して、この三年間お小夜に係り合った人間

を調べて上げて見るが宜い。その中に浅川団七郎という浪人者がいると判ったら、下手なちよっかいを出さずに、居所だけを突き留め、遠巻に見張って、すぐ俺のところへ言っ来て、——明日の朝までだぞ、宜いか」

「合点だ」

ガラツ八はもう、尻を七三に端折っております。親分の様子で、事件がようやく峠を越したことが判ったのでしよう。

八五郎の後ろ姿を見送って、平次はすぐお小夜の家の際——と言っても、これは音羽の通りに面した紙屋の皆次の店へ入りました。

「あ、親分さん方」

皆次は二つ三つづけ様にお辞儀をしました。二十五六のまだ若い男で、額の狭い、鼻の低い、少し出ッ歯で、小柄で、平凡そのもののような男です。

「浅川団七郎という浪人者が、時々お小夜のところへ来たそうだが、お前は気が付かなかったかい」

平次の問いは誰も予期しないような種類のものでした。

「いえ、一向見たこともありません。——お小夜さんのところへ出入りする人間で私が気が付かない筈はないんですが——」

「その通りですよ、この人は間がな隙がなお小夜さんの家ばかり覗いていたんですから」

店の奥から我慢のならぬ注を入れたのは、年上らしい女房のお秋でした。これは頑強で、真っ黒で、牝牛のような感じの女です。

「お前は黙って引ッ込んでいろ、——親分方の前じゃないか、馬鹿ッ」

皆次は精いっぱい亭主の威厳いげんを示すのでした。

「その浪人者があの晩も顔を隠して、この路地へ入って来たそうだが——」

「少しも気が付きませんよ、親分さん」

「それじゃ、あの晩、この路地を誰と誰が通ったんだ」と平次。

「地主の寅吉さんは通りました。それから下女のお米さんが表の湯へ行って帰って、——其処にいらつしやる兼松さんも、ちよつと覗いてそのまま帰った様子でしたが」

それだけ見張って居れば、女房のお秋が嫉妬やきもちを焼くのも無理のないことです。

「人一人殺されるといふのに、物音も何んにも聞えなかったのか」「お米さんが湯へ行くと間もなく、私の方も店を閉めてしまいました。目白の鐘かねが亥刻よつ（十時）を打つと、何時でもそうするのですが——」

「それじゃその後で下手人が来たのかも知れないな」

「そんな事かもわかりません」

「お前さんは外へ出なかつたかい」

「出やしません。女房や小僧にも訊いて下さい、——お小夜さんはあの通り綺麗だったから、いろいろ罪を持っている様子でしたが、私などには振り向いてもくれません」

皆次は先を潜って弁解をしているのです。

翌る朝、三つ股の源吉のところへ泊っている平次のところへ、一番先に駆けつけたのは、越後屋の兼松でした。

「銭形の親分さん、困ったことが起りました」

米屋の主人の聰明な顔が、ひどく困惑こんわくしております。

「何んだえ、越後屋さん」

「庵室の鉄童さんが見えなくなりました」

「そうか」

平次はひどく落着いております。

「そいつが下手人で、危なくなつて風をくらつたんじゃないやあるまいね」

三つ股の源吉は半分顔を洗つて飛出します。

「大丈夫だ、庵室から一と晩出なかつたというのは本当だろう、鉄童は下手人じゃない。第一そんな虐むじたらしい殺しようをしたなら、返り血の始末だけでも大変だ。着のみ着のままの鉄童にはそんな暇はなかつた筈だ。それに——」

平次は何にか外の事を考えている様子です。

「じゃ、何処へ行ったんでしよう」

兼松はひどく気を揉もんでいる様子です。

「こいつは言わない方が宜いだろうと思つたが、——そんなに心配をするなら話してやろう。あの鉄童という人間は、自分の素姓が解りそうになつて逃げ出したんだ」

「素姓？」

「どうかしたら、庵主の鉄心道人が逃がしたかも知れない」

「それはどう言うわけでしょう、親分さん」

兼松は縁側へにじり上っておりました。平次の言葉には何にかしら容易ならぬものがあります。

「驚いちゃいけないよ、——あの鉄童というのは男じゃない」

「えッ」

「世間体をはばかって男にしておいたんだろう。話の調子も、身体の様子も、間違いもなく男だが、きのう庵室の裏の井戸端で洗濯をしているのを見ると、盥たらいの前にキチンと坐っている。男なら盥またを跨いでやるところだ。不思議でたまらないから柄杓ひしやくか茶碗を貸してくれというところ、チョコチョコと刻み足に駈け出して、草履ぞうりを内輪に脱いだ」

「——」

「声も男にしては細かいし、よく気をつけて見ると、咽仏のどぼとけが見えない」

平次の言葉は争う余地ありません。

「そんな事が、——そんな馬鹿な事が——」

兼松はゴクリと固唾かたずを呑みました。恐ろしい幻滅に直面して、しばらくは分別を纏まとめ兼ねた様子です。

「お前さんの信心にお節介をするわけじゃないが、こんな事を隠しておく方が罪が深いだろう。あつしは唯の岡っ引だから、相手に遠慮はしていられない。まして、寺社の御係り外の、言わば潜りのお宗旨は、気の毒だが一々庇かばっちゃいられないよ」

「——」

「鉄心道人というのは、なかなかの偉物えらものらしいが、女を男に仕立てて、庵室へ寝泊りさせるようじゃ、大した生仏様でもあるまい。

鉄童が逃げ出したのは、大方この平次に女と覚られたと感づいたためだろう」

平次の言葉には、判官の烈しさと、人間らしい思いやりとがありました。

「それじゃいよいよ以って、あの鉄童が怪しいじゃないか。自分が女なら、お小夜のような凄^ひい女が入^いって来るのを、黙^もって見ている気にはなるまい」

三つ股の源吉は、新しい論理を組み立てました。

「その通りだ。俺も鉄童が女と判^はったとき、余^あつ程引^ひつ立てようかと思^{おも}ったが、お小夜を殺^{ころ}したのはどうも鉄童らしくない。宵^よのうちの人目を避^さけて、坊主頭^{ぼくし}があ^あの路地^ぢへもぐり込^こめそうもないからだ」

「頭中^{かみぢゆう}を冠^{かん}って、浅川^{あさか}団七郎^{だんなしちろう}に化^まけるとしたら？」

源吉の想像^{さうぞう}はすばらしい飛躍^{ひやく}を遂^なげました。

「俺もそれを考^{かん}えている。庵室^{いんしつ}から出^でないというのは、鉄心道人^{てつしんだうじん}の言葉^{ことば}だけだから、信用^{しんよう}は出来^こない。——とにかく、——八五郎^{はちごろう}が帰^{かえ}って来て、浅川^{あさか}団七郎^{だんなしちろう}の素姓^{すせい}と居所^{きょしょ}が判^はりさえすれば、目鼻^{めばな}が付^つくと思^{おも}う」

平次はそればかりを頼^{たの}みにして居^ゐる様子^{ようす}です。が、八五郎^{はちごろう}が帰^{かえ}って来た^こたのは、その日も暮^くれて、平次^{へいじ}がもう諦^{あきら}めて神田^{かんだ}へ引揚^{ひきあげ}げようと言^いう時^{とき}でした。

七

「親分^{おやぢ}、お小夜^{おこや}はありゃ人間^{にんげん}じゃねえ」

ガラツ八は息を継ぐいとま違もなく、驚きをブチまけるのでした。

「何を聴き出したんだ、八」

「話しになりませんよ、親分。あの女は幾つしんしょう身上をファイにして、幾人の人間を殺しているか判りやしません、——一番堅そうな男に喰い付いて、自分の思う通りになるまで、手をかえ品を換かえ揺すぶるんだ。身上も、生命も吸い取ると、蜘蛛くもの巣に引つ掛つたあぶ蛇のようにされて、何んの未練もなく振り捨てられるんだ。恐ろしい女があったものさ、——鉄心道人だつてその餌の一人さ。あの女がもう二月三月生きていると、清水寺の清玄のようにされて、首でも縊くるか、身でも投げるか、地獄へ真まつ逆様に落ちるより外に道はなかつたんだ」

仏説の羅刹鬼女らせつきじよ——そんなものをガラツ八は考えていたのでした。

「そんな事は解っているよ。鉄心道人はもう半分地獄に墮おちている。それより浅川団七郎の方はどうしたんだ」

「それですよ、親分」

「何がそれだ」

「下したつ引五人に手伝わせて、一日一と晩江戸中を捜し、お小夜の行った先々を当つて見たが、そんなケダモノはどこにも居ねえ」

「何んだと？」

「浅川にも、深川にもお小夜は見識けんしきが高いから、素浪人や貧乏者を相手にする女じゃありません。三浦屋に勤めている頃から、音羽へ引ひつ込むまでの間に、お小夜と係り合つた男も少くないが、みんな身分の者ばかりで、浪人者などは寄せつけもしませんよ」

「フーム」

「お小夜の気じゃ大名のお部屋様にでもなる心算つもりでいたんでしよう」

「本当に浅川団七郎という浪人の事を聞かないのか」

「聞きませんよ」

「フーム」

「あんまり馬鹿馬鹿しいから、帰りにちよいと音羽の家へ寄って、あのお米とか言う下女に当って見たが——」

「あれは田螺たにし見たいな女だ。どうしても口を開かねえ」

平次もお米の剛情には驚いている様子です。

「ところが、あつしには皆んな言ってしまったよ。半襟一と掛けにも及ばねえ、——浅川なんて浪人は来たこともないと言ってる。へッ、驚くでしょう、こいつは」

「何んだと」

「浅川という浪人の後ろ姿を見たことがあると言え——と脅おどかされたんだそうですよ」

「本当か」

「本当にも本当でないも、——今聴いて来たばかりの煙の出るところ、お米坊はあれでなかなか良い娘ですよ。親分、ことによつたら」

「馬鹿ッ、それどころじゃないぞ。もういちど行って見よう。来いッ、八」

平次は三つ股から音羽まで飛びました。続くガラッ八、源吉、四方はもうすっかり暮れて、彼方、此方には灯も入っております。

お小夜の家へ来て、一番先に飛込んだ平次。

「居ないッ」

ひどく息がはずみず。

「井戸端かも知れませんが、親分」

「うん」

家の中を突き抜けて裏口へ出ると、井戸端に何やら踞うずくまるもの。

「あつ」

飛んで行った平次の手に抱き起されたのは、もう息の絶えたお米でした。細紐で後ろから締められて、声も立てずに死んだのでしよう。

触って見ると体温が残っておりますが、もう呼び活いけても、さすっても、息を吹返す見込みはありません。

「親分、こいつは誰でしょう」

「浅川団七郎だ」

「へエー」

「少し気が変になったかも知れない、——何をやり出すか解らない。すぐ行って見よう」

「何処へ？」

平次はもうそれに返事もしませんでした。夕闇の中へ飛出すと、真まっすぐに雑ぞう司しガ谷や庵あん室しつへ。

ガラッ八と源吉が何が何やら解らぬなりにそれについて駆け出します。

庵室の中は貧しい灯が入って、鉄心道人は看かん経きんをおわったところでした。

「さア、道人、鉄童を何処へやった、——言つて貰おうか」

「——」

詰め寄る平次をジロリと見たつきり、道人は静かに仏壇の前を

離れました。恐ろしく尊大な態度です。

「あの女は何処へ行つた——まだ判らないか、鉄童と言う女をどこへ隠した」

「？」

「氣取っている隙ひまはないぞ、お小夜を殺した下手人は、下女のお米を殺して、今度はあの鉄童を狙つて来た筈だ。半分氣の違つた人間だ、何をやり出すか判らない。さア言つて貰おう、鉄童をどこへやつた」

「——」

「えッ、言わないかッ、人の命は大事だ。山師坊主に氣取られて、俺は隙ひまを潰してはいられないぞ。三つ股の兄哥、この道人を引括くくつてくれ。寺社のお係りへ渡して、鰯いわしを銜くわえさして四つん這いに這わしてやる」

平次は相手がしぶといと見たか、何時にない十手を取り出してふり冠つたのです。

「——」

鉄心道人はもう一度ジロリと見上げると、さすがに力及ばなかつたものか、無精らしく立ち上つて裏の雨戸を引開けました。

「あッ」

驚いたことに、眉を焼くような焰ほのお。

「た、大変ッ」

庵室の後ろの納屋なやの入口から、車輪のような煙が噴出ふきして、その間からカッと焰が舌を出しているのです。

「八、後ろへ廻つて窓をブチ壊こわせ。中に人間が二人いるぞッ、危いから氣をつけろ」

「よしッ」

「三つ股の親分は、その道人を頼むッ」

平次は言い捨てて、お勝手から手桶の水を一杯、半分は有合せの筵むしろにかけて引ッ被りかぶ、半分は納屋の中にブチまけて、パツと飛込みました。

×

×

納屋の中にいたのは、越後屋の兼松と弟子の鉄童。鉄童は首を絞められて、息も絶え絶えでしたが、手当が早かったので助かり、兼松はガラツ八の糞力くそぢからで窓から担かつぎ出されると、焼け落ちる納屋を眺めてゲラゲラと笑っております。

可哀想に気が違ってしまったのでした。

火事が済んで気が付くと、鉄心道人は三つ股の源吉の手から逃れてそれつきり姿を隠しました。

庵室と納屋の焼跡を見ると、物欲てんたんに恬淡だと思わせた鉄心道人が、何百両という黄金を溜込んでいたことが発見されたのです。

何も彼も済んでから、

「あッしには少しも解らねえ。あれは一体どうした事でしょう、

親分」

ガラツ八は例いっのような絵解きをせがみます。

「気の毒なことに兼松は鉄心道人を活き仏のように思っていたのさ。かなりの身上しんしょうも入れあげ、出来るだけの事をしたが、お小夜が弟子になって庵室へ入り込むと聴いて気が氣じゃなかった」

「――」

「兼松はお小夜の前身をよく知っていたんだらう。上野の役僧を一人台なしにした事も、大旗本をつぶした事も、役者が首を縊くつ

たことも、——お小夜が道人の傍へ来ると、いかに道徳堅固の道人でも、万一の事がないとは言えない。道人はあの通り若くて、ちよつと良い男だ、——兼松にしては、こんなに身も心も打込んで、身上まで入れ揚げた活き仏が、唯の人間になつてしまつてはやりきれなかつたろう。危ないものは遠くへやるに限る、道人を活き仏のままにして、心のままに信心するには羅刹女らせつじょのような女を側へやっっちゃいけない——多分こう思い詰めて、お小夜を殺す氣になつたのだらう。変な信心に凝り固まつて、少し氣が変になりかけた兼松は、それが悪事とは思わなかつた。それどころか仏敵を滅ぼすほろのは、功德の一つだと思ひ込んだに違ひない」

平次の絵解きは少しの無理もなく發展しました。

「——へエ——」

「ところで、兼松ほど夢中になつた人間でも、お小夜のような阿婆摺ぼずれ女の命と、自分の命と取り換えちゃ叶わないとおもつたんだらう。仏敵は亡ぼしたいが、自分が縛られたくない。そこで思ひ付いたのは、この世にない下手人を拵こさえることだ。浅川団七郎などという浪人は、最初からこの世にない人間さ。兼松はそれを拵えて、疑いをみんな浅川団七郎に向けてしまった。うまい細工だが、自分だけが浅川団七郎を知っていると云つちや拙ますいから、田舎からポツと出のお米をだまして、やはり浅川団七郎を見たと言わせた、——それが拙ますかつた」

「それを、お米がベラベラと喋舌しゃべつてしまいそうになつたんで驚いたというわけだね」

「その通りだよ。お前がお米を口説くどき落したと聴いたときは、兼松はまだお米を殺す氣にならなかつたかも知れないが、鉄童が女

で、鉄心道人は飛んだ食わせ者だと聞くと、フラフラと変な心持になった」

「なるほどね」

「兼松は自棄やけになった、——その上あんまり落胆らくたんして、気が少し変になったんだろう。お米を殺すと鉄童もそのままにしては置けない心持になったに違いない。とうとうあんな騒ぎになってしまったのだよ、納屋へ火をつけたのも兼松だ」

「可哀想だね、親分」

「イヤな捕物さ。でも、いちばん無欲な顔をする奴は一番大欲で、いちばん取済ました奴が一番臭いことだけは確かだよ」

「お小夜は」

「外面げめん如菩薩によぼさつだ。金持、親分、旗本と手玉に取って、自分の縹緞きりようと才智で、活き仏さまを地獄に引き摺ずり込もうとした女だ。あんな女は石の地蔵さままでモノにする気になるだろうよ」

二人はそんな事を言いながら、江戸川縁べりを歩いておりました。木枯こがらしの吹く寒い日の夕方です。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十四年十二月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第六卷 河出書房 昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行 錢形倶楽部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>